

勇気のスイッチ

東京都 東京学芸大学附属世田谷小学校 6年 立見 理彩子

今日の荷物は、いつもに比べて格段に重い。学校からバイオリンを持って帰らなければいけないからだ。大粒の雨が私のかさをたたき、荷物はすでにぬれてしまっている。

もう20分近く待たせようか。ようやくバスが来た。バスは空いていて、私は一人席に座った。今までずっと荷物を持っていたせいか、手がびりびりする。私はしびれた指を開いたり閉じたりした。そして痛みがなくなったあと、タオルで荷物をふき、本を開いた。

少し先のバス停でドアが開いた。誰かが乗ろうとしている。ふと顔を上げてみると、車いすに乗った女の人だった。私が座っている席は、車いすの固定席のため、よけなければいけない。急いで荷物を持って席を立った。

「ありがとうございます。」

と女の人が出た。私は笑顔を浮かべて、

「どういたしまして。」

と答えた。笑顔とは裏腹に、時間がたつにつれて、再び手がしびれてきた。

「荷物を持ちますよ。」

後ろから聞きなれない発音の音が聞こえた。声が出た方を振り向くと、外国人の女の人が青い目をこちらに向けてほほえんでいる。

「いいえ、とても重いので大丈夫です。」

と私が遠りよすると、

「持ちますよ。」

ともう一度、よりほほえみながら言った。そこまで言ってくれたのだからと思った私は、お礼を言い、バイオリンを持ってもらうことにした。なんてやさしい人だろう。その人は、少しもいやそうな様子を見せずに、ずっとバイオリンを持ち続けてくれた。

私が降りるバス停が近づいてきた。私はお礼を言おうと思ったが、日本語で「ありがとう」と言うべきか、英語で「サンキュー」と言うべきか迷った。いっそのこと、その人が降りるバス停までいっしょに乗っていってしまおうかと思ったくらいきん張した。

すると、その人は私の内心を悟ったのか、

「降りますか。」

と聞いてくれた。その言葉がどれだけ私を安心させてくれたことだろう。私は、

「はい。ありがとうございます。」

と言い、バイオリンを受け取った。そして、親しみのこもった笑顔を浮かべた女の人と別れ、バスを降りた。

今まで私は、お年寄りの人など日本人には親切にしてきたつもりだが、外国の人にはしたことがない。日本語が通じないと思い、話しかけようとしなかった。

しかし、今回のできごとで、私は、あの女の人のお顔を思い出して勇気を出せば、外国の人にだって親切にすることができるような気がした。あの女の人のお顔は、私にとって勇気のスイッチだ。これからは困っている外国の人に会ったら、勇気のスイッチを入れて、声をかけようと思う。